
暗闇からのキボウの歌

すかぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗闇からのキボウの歌

【Nコード】

N2829Y

【作者名】

すかぶ

【あらすじ】

綾崎紅騎あやなきこうきは突然トラックにはねられて死んだ。

死んだはずの紅騎が目覚めた世界は死語の世界だった。

紅騎はある人物の思い出だけ欠けていた。それも大事な人の記憶だった……

大人気アニメAngel Beats!の二次創作小説となっています。

岩沢×オリ主とベッタベタですが、楽しんでいただけたらうれしいです。

注) かなり原作とは違いますのでその点はお許しを。

無力

「一枚、二枚・・・」
俺はいま万札を数えている。

「・・・よし、ちゃんと三十万あるな」

なぜかって？それは今日はアイツの誕生日だからな。

アイツはギターをやっている。

腕はかなりの物で時々俺と弾き合ったりもする。

かくいう俺もギターに没頭している人間の一人だ。

俺もアイツもバンドを組んでいないので周りからは不思議な目で見られることもある。別に気にしてないしバンドにも興味ない。

アイツもあまりバンドには興味ないらしい。そんなだから通じ合うところもあつたのだろう。

俺とアイツは普通に恋をして付き合つて普通の恋人同士のような毎日を送るはずだった。

・・・けれどアイツは三日前に死んでしまった。原因は脳梗塞だそうだ。

アイツが脳梗塞で倒れて死ぬまで一ヶ月もあつたのに見舞いの一つも行つてやれなかった。

俺の少ない人間関係じゃ三日前にアイツが死んだことを知るのが精一杯だった。

だから俺は、アイツが気になると言っていたギターを買つてやろうと決心した。

『お前、何か欲しいも乗つてあるか？』

『ううーん・・・特には』

『そつ言うなつて、一つくらいあんだろ？』

「・・・私は・・・お前が側にいてくれれば何もいらぬ・・・」
「え？今なんて言った？？」
「な、何でもない！あ！あれだ！前紅騎と一緒に見に行ったギター！」
「ああ・・・あれか、けどかなり高かったぞ・・・俺たちには手の届かないくらい・・・」
「・・・だから何も無いっていったじゃないか」
「んん・・・そっかあ」

せめてもの償いに・・・

「すみません・・・」

俺は急いでアイツが眠っている墓へ向かった。

アイツの両親は連絡をしても身元の引き取りを拒否したらしい。

だからアイツは死んだ病院の近くの墓に埋葬された。立ち会ったのは担当の医者だけ。

俺は許せなかったアイツを見捨てた両親を、アイツの夢をいとも簡単に切り捨てた神様を。

最後まで何もしてやれなかった自分自身を。

俺は無我夢中で走った。一秒でも早くアイツに会いたかった。

キイイイイ

「・・・え？」

雨が降って濡れた路面。

霧によって悪くなった視界。

酒に酔った運転手。

「・・・岩・・・沢」

ぐしゃあ・・・

俺は何の抵抗も出来ずにトラックの下敷きになった。

無力（後書き）

少しずつ、確実に更新していきたいと思います。
応援よろしくお願いします。

死後の世界（前書き）

楽しんでいってください

死後の世界

「・・・はっ！」

ここはどこだろう？

確か俺は・・・トラックの下敷きになって・・・

俺は死んだのか・・・

「じゃあアイツもいるのか」

・・・アイツ？アイツって誰だ？そもそも俺はなんでトラックの下敷きに？

「・・・くっ、思い出せない」

「何が思い出せないのかしら？」

振り返ると3メートルほど先に銀髪の少女が立っていた。

「・・・だれ？」

「名前を聞く前にそちらから名乗ったらどう？」

それもそうか・・・

「俺は綾崎紅騎^{あやざきこうき}。ここはどこなんだ？俺は生きてるのか？」

少女は無表情で答えた。

「ここは死後の世界。あなたはもう死んでいるわ」

やっぱり俺は死んだのか。でも本当に死んでるのか？脚はちゃんと生えてるし心臓も動いている。

「教えてくれ、俺は本当に死んだのか？」

少女の口元がかすかに動いた。

「hand sonic」

少女の腕から刀身が形成され少女がかがんだと思うと、いつの間にか距離がゼロになっていた。

「教えてあげる」

ドシューッ

「ぐ・・・はあ・・・」

心臓を貫かれた。

一気に視界が狭まり後はただ暗闇だけが広がっていった。
「まったく・・・なにやってんのよコイツは」
そんな声を聞いた気がした。

死後の世界（後書き）

忠実なようなそうじゃないような・・・
曖昧ですみません・・・

戦線前線基地（前書き）

ここは結構忠実になってると思います。
それではどうぞ！

戦線前線基地

「んっ……まぶし……」

目元に強い日差しを感じて俺は目を覚ました。

二つ並んだ白いベッド、独特の消毒の臭い、ここは保健室か。

「……そうだ、俺は心臓を刺されて……」

刺されたあたりのところを触ってみるが傷一つ着いてない。

本当は刺されていないと思ったが制服にくつきりと刃物で刺したような穴が開いていた。

「いったい何だったんだ……」

「あ、気がついたみたいね」

一瞬警戒したが昨夜の少女じゃなくて少しほっとした。

「だれだ？アンタは……」

紫の髪と目立つリボンが印象的な女の子だった。

「俺は綾崎紅騎、アンタがここまで運んできたのか？」

「わたしはゆり。そう、わたしが運んだわ」

だとすると見かけによらずかなり力があるみたいだ。

「そうか……それはありがとうな」

「ありがとうついでに頼みがあるんだけど……」

ゆりがこちらに顔をぐっと近づけてきた。

「紅騎、あなた戦線に入らない？」

「せ、戦線？」

彼女はかなりの近距離で話していることに気づいているのか？

「そう、死んでたまるか戦線。まあここじゃなんだし基地に来なさい！」

この様子じゃ気づいてないようだ。

「基地？そんな物があるのか？」

「つべこべ言わず着いてきなさい！」

強引にベッドから引きずり下ろされ俺は西部劇の引きずり回しのよ

うに連れて行かれた。

前線基地、校長室に着いたときにはとつても悲惨な姿になっていたのは言うまでもない。

「川」

・・・川？

そう言つてゆりは校長室の扉を開けた。

「みんな、新しいメンバーを連れてきたわよ」

中には女が二人と男が三人（内一人はソファで気絶している）がいた。

「お、ゆりっぺ、また連れてきたのか？・・・おおっ、二日連続で

穴あき学ランとは」

「まあ、そう言わないの日向君」

青い髪の男、日向は俺に手を差し出してきた。

「俺は日向、まあ仲良く行こうぜ」

「ああ、こちらこそよろしく」

俺も日向の手を握った。

「んん・・・ここはどこだ？」

さつきまでソファの上で気絶した男が起きたらしい。

「お、そっちの奴も起きたみたいだぞ」

「ちようど良いわアンタも戦線に入りなさい」

「戦線？」

男はだるそうな体を起こして聞き返してきた。

「そう、死んでたまるか戦線。ん、なんかしっくりこないわね」

「じゃあこんなのはどつだ？走馬燈戦線」

「それ死ぬ寸前じゃない！」

「じゃあ死にもものぐるい戦線」

「必死過ぎじゃない！」

「四面楚歌戦線」

「死なすわよ！」

ことごとく日向の意見は没になっていく見てて痛々しいほどに。

「じゃ、じゃあここは新入りに聞いてみようぜまず紅騎から！」
いきなり俺に降ってきた。

「お、俺？」

「どうなのよ？」

ギンと睨まれた。おおこええ・・・

「ゆりっぺ戦線」

「殺す！」

ひいひい！

「お、落ち着け！じゃあ今度はお前！」

さっきまでぼーっとしてたもう一人の新人？が面倒くさそうに答えた。

「勝手にやってる戦線」

するとずっと黙り込んでいたばかりかい斧を担いだ男がつかつかってきた。

「貴様、ゆりっぺに生意気な口を！もう一回切り刻んでやろうか！？」

随分短気な男だな・・・

「勝手にやってるって言ってるんだろ！？俺にかまうなよ！おれはすぐに消えるんだよ！」

おお、コイツもかなりの短気だ。

「消える？・・・まあ運良く来世で人間になれたらうれしいでしょうね」

「どついつ意味だよ」

ゆりは小さくにやりと笑うと続けた。

「ちょうど良いわ紅騎、あなたも聞いてなさい。」

「お、おう・・・」

すると周りが暗くなりスクリーンが降りてきた。

「二人とも分かっているだろうけどここは死んだ者が集まる世界よ。現世と来世の中間と言ったところかしら。ここで消えてしまつと来世は人間以外のものに魂が転成するかもしれないのよ」

タイミング良くスクリーンに様々な動物の画像が流れる。全部節足動物系なのはあえて黙っておこう。

「そこでわたしたちは戦うことにしたの戦ってこの世界を手に入れるのよ！」

今度は節足動物から一人の少女の映像に切り替わった。

無表情で金色の瞳、透き通るような肌輝かんばかりの銀髪。

昨夜俺の心臓を貫いた張本人だ。

隣の新入り二号（仮名）も同じような表情をしている。

「これが私達の敵”天使”よ。こいつを倒してこの世界を手に入れるの！」

スクリーンが戻され部屋が明るくなった。

「改めて聞くわ戦線に入ってくれない？」

最初に口を開いたのは新入り二号（仮名）だった。

「少し考えさせてくれるか？」

「いいけど、この部屋以外でね。」

どういう意味だろう・・・新入り二号（仮名）は悔しそうな顔を浮かべているが。

「分かった。合い言葉は？」

観念したように了承した。

「紅騎、あなたもよ」

俺か・・・まあ、行く当てもないし断る特別な理由もないし。

「俺も入るよ、死んだ世界戦線に」

「いいわね、その死んだ世界戦線って。よし採用！」

ゆりはぐつと親指を突き出した。

片思いな再会（前書き）

ここからぐっとオリジナル臭が漂ってきます。

片思いな再会

「それじゃここにいるメンバーだけでも紹介するわね。彼は日向君。その横が野田君バカっぽいけどバカよ」

日向が苦笑する。野田の方は別に気にした様子は見せていない。

「その隅っこにるのが椎名さんで、そっちにるのが岩沢さん、彼女は陽動班のリーダーなの」

岩沢だったっけ？がこちらをじっと見つめてきた。俺の顔に何か着いているかな？

「そしてわたしがゆり、戦線のリーダーよ」

「俺は綾崎紅騎だ。」

「俺は……音……無……？」

「音無か……記憶がないパターンはさほど珍しくない。まあ時期に思い出すさ。」

日向が音無の肩をぼんと叩いた。

「じゃあ、音無君はわたし達と実際に行動する方に入ってもらうわ。

綾崎君は岩沢さんの陽動班に入って」

「ん？俺が陽動班？なんで？」

「だってさつきから岩沢さん綾崎君の方をずっと見てるんだもの。

岩沢さん、気に入ったの？」

岩沢さんは黙って俺の方に近づいてきた。

「綾崎……紅騎……なのか……」

「そ、そうだけど……岩沢さんだっけ？俺の顔に何か着いてる？」

その瞬間岩沢さんは驚いたような表情を見せ、うつむいたかと思いきり俺に平手打ちをしてきた。

バシン！！

「……馬鹿！！」

そう叫ぶと岩沢さんは校長室、もとい前線基地から飛び出している。

一瞬しか見えなかったが岩沢さんは泣いていた。

「……あゝあ紅騎、初日から女を泣かせやがって日向あきれたような顔をしていた。」

「……浅はかなり」

ここにきて初めて椎名さんの声を聞いた気がする。

「……で、綾崎君、岩沢さんとは生きていた世界からの知り合い？」

俺が死後の世界に来てまだ一日もたっていない。それに岩沢さんとは初対面だ。

つまり生前岩沢さんと会っていた事になるのだが……

「分からない……というより思い出せないんだ……」

「何だ、お前も記憶がないパターンか？」

いや、生前のたいのことは覚えている。生まれたときから死ぬまで。

……けど何か引つかかる。

「分からない……分からないんだ……」

「それじゃあ今日は解散よ、綾崎君はちょっと残って」

「……はい」

片思いな再会（後書き）

・・・まあこうなるのは必然的でしたね。
今後どう書いていくか楽しみです。

屋上（前書き）

そねどはむひん

屋上

俺とゆりは学校の屋上にいる。あたりはあかね色に染まり、校庭では野球部がグラウンドの整備をしている。

「・・・まずは、あなたと岩沢さんの関係について教えてちょうだい」

やっぱりそのことか・・・

「そんなに気になるのか？」

「そりゃそうよ。いつもクールで我が道を進んでるって感じの岩沢さんが、あんなに感情的になるなんて。ちょっとした事件よ」

そうだったのか。それなら聞きたがる理由も納得がいく。

・・・だけと思い出せない。どうしても。

「さっき言ったとおり本当に分からないんだ」

「一つも？」

「ああ、だけど生前の記憶ははっきりしているんだ。どこで生まれたのかどうやって死んだのか」

「そう・・・じゃあどんな未練を残して死んだの？」

未練？現世での未練か・・・

俺は思い出そうとする。必死に、どんな些細なことでも逃そうとせすに。

すると激しい頭痛がしてきた、手足が震えて寒気がした。なぜか涙まで出てくる。悲しくなんか無いのに。

「う、ごめん・・・無理に思い出させようとして・・・」

ゆりはポケットからハンカチを取り出した。ふけというのだろう。

「いや、かまわない大丈夫だ」

俺はその手を少し乱暴に払った。

「・・・でも」

「少し一人にしてくれ・・・まだ死んだって実感できそうにないみたいだ」

俺は嘘をついた。もうとつくに死んだことは受け入れている。ただ同情をされて欲しくないだけだった。

「分かったわ・・・気が向いたら第二講義室に行ってみて」

「ああ、気が向いたらな」

ゆりは屋上を後にした。

・・・さて、どうするか。

日が暮れ始めているが、寮に帰るには少し早いみたいだ。

「第二講義室か・・・」

確かそう言っていた。気が向いたら行ってみると。

やることもないし行ってみるか。

屋上（後書き）

今回はちょっと短めです。
次回をお楽しみに。

GIRLS DEAD MONSTER (前巻)

メカクシメカクシ。

Girls Dead Monster

「第二講義室・・・は、ここか・・・」

多少迷いながらも何とかゆりに言われた教室に来ることが出来た。

「ゆりに道を聞いておけば良かった」

中では女の子四人が演奏をしていた。見た感じバンドのようだった。かなり防音設備が良いのか少しの音しか漏れてこない。

「・・・さて、どうしたものか」

四人の中に見たことのある顔があった。さっき思い切りビンタをかましてきた張本人岩沢さんだ。

「・・・とりあえず事情を話すか」

合う度にビンタを食らってはおれの顔が持たない。

ちょうど演奏が終わったらしい、俺に気付いたらしくポニーテールのギターを持った女の子が扉を開けてきた。

ガラ・・・

「さっきからいるようだけど何の用？」

「・・・気のせいだろうか。岩沢さん以外の三人から睨まれている気がするのだが・・・」

「あ！確か新しく戦線に入った二人の内一人ですよ」

ドラムを叩いていた女の子が思い出したように話した。

「するとこの人が噂の岩沢さんを泣かせた人ですね!？」

「・・・」

すると、岩沢さんは無言で立ち上がりそのまま教室を出て行った。

「あっ、どこに行くんだよ!」

俺は岩沢さんを追おうとしたが教室を出る前にガシッと両肩を掴まれクルッと後ろを向かされた。

真正面に獲物を捕まえた蛇のごとく目をギラギラさせた三人が並んでいた。

「さうて・・・詳しく聞かせてもらおうじゃないシンイリクン」

終わった。絶対に死ぬよ。もう死んでいるが殺される……
「ギヤアアアア!？」

「……やれやれ」

俺が解放されたのはきつちり三人分殺された後だった。
もちろんその後ちゃんと事情は話した。一部分の記憶が消えていると。

三人は一応納得してくれたが、またすぐに顔色を変えて俺を追い出した。

「だったら早く誤解を解いてこい!!」

だから俺は最初からそうしようとしていたんだって!!

「どこ行っただらうな……」

いまいちどこに何があるのか分からないので学校中を歩き回るしかなかった。

あたりはすっかり日が暮れて人気も少ない。

だからはつきりと聞こえてきた。あれはギターの音だ。

「屋上か……」

俺はすぐに屋上へ向かった。

屋上に続く階段を上って扉を開けるとやっぱりいた。

岩沢さんはベンチの上でギターを弾いていた。

歌詞もないしメロディーも単調で、あまり曲とは言いにくい。ただの音の集まりみたいだ。

「何しに来たの？」

先手を打たれた。俺は戸惑いながらも隣の二つ目のベンチに座った。

「いや、ちよつと岩沢さんが誤解をしているみたいだからさ」

すると岩沢さんはギターを引く手を止めた。

「私は誤解なんてしていない。お前は綾崎……紅騎、紅騎なんだ

るっ?」

やっぱり俺のことを知っているのか・・・俺の知らない記憶を・・・

「私だ!岩沢、岩沢まさみだ!」

立ち上がって必死に訴えるが俺は戸惑うだけだ。すまない気持ちでいっぱいになる。

「ちょっと落ち着いてくれ!岩沢さん!もう少し冷静になつて」

岩沢さんはハツと我に返ったような顔をしてベンチに腰を下ろした。

「・・・すまない。取り乱して」

二度三度深呼吸をしてようやく落ち着いたらしい。

俺は一つずつ確かめるように質問をした。

「岩沢さんは生前の記憶がはつきりしている?」

コクツ・・・ゆっくりとうなずいた。

「俺のことを生前知っていた?」

コクツ・・・またうなずいた。

「じゃあ、俺がどう死んだのかは知ってるか?」

フルフル・・・今度は首を横に振った。

ということは岩沢さんが先にこの世界に来たって事か。

「いつ頃この世界に来たの?」

「一ヶ月前・・・」

つて、この質問は重要じゃないか。

「今度は私から質問して良い?」

完全に落ち着いたらしく岩沢さんはじつところちらを見た。

「どこで生まれたのか覚えている?」

俺ははつきりとうなずいた。

「アンタは生前何をしていた?」

これは覚えている。俺はちっちゃいライブハウスでバイトをしていた。

そしてギターもやっていた。

「ライブハウスでバイトをして・・・ギターをやっていた」

「誰と?」

・・・誰と？俺はバンドをしていたのか？

いや、俺はバンドにはあまり興味が無かったはずだ。

じゃあ、特定の誰かと二人でやっていたことになる。

・・・だめだ、思い出せない。

「・・・分からない」

「本当に思い出せない？」

「ああ・・・」

岩沢さんは妙にすっきりとした顔で笑った。とても悲しそうな笑顔だった。

「そっか・・・特定の記憶だけが無いみたいだね。アンタも苦労だね」

するとベンチから立ち上がりスツとこちらに手を差し出した。

「私がアンタの記憶を取り戻す手伝いをしてやるよ。その代わりに私達のバンドに入ってくれないか？」

交換条件か。悪くない。俺も生前はギタリストだったんだ。

「むしろこっちからお願いしたいよ。」

俺は岩沢さんの手を握った。思ってたよりもずっと小さくて柔らかい手だった。

「よろしく、岩沢さん」

「・・・よろしく、綾崎」

G i r l s D e a d M o n s t e r (後書き)

これでもうやく物語が一步進めました。

これからどういつ展開にしようかな・・・

another view〜岩沢〜(前書き)

六話の岩沢視点です。

another view 岩沢

最初会ったときは驚いた。

しようがないだろう？またあえるなんて思いもしなかったんだから。ここに来たって事はアイツは死んだってことだ。

アイツが死んだって事実は残念だったけどまた会えたうれしさの方が大きかった。

・・・だけどアイツが私と顔を合わせても表情一つ変えない。

まるで、赤の他人を見るような目だ。

記憶が無いってパターンはここではよくある話だったから。アイツもそれかなって思った。

けどアイツは自分の名前をフルネームで言えた。記憶が無い奴独特の雰囲気は無い。

それじゃあなんで？なんで私に気がつかないんだろう。

顔がよく見えないのかと思ってできるだけ視線を合わせてみる。

アイツは私が見ていることに気がついたようだけど、不思議そうな顔をするだけだ。

しようがない、こつちから声をかけてみよう。

「・・・だつて岩沢さん、さっきからずっと綾崎君の方ばかり見てるんだもの。」

ちようどゆりが私の仕草に気づいたみたいだ。私はそのタイミングでアイツに声をかけた。

「綾崎・・・紅騎・・・なのか？」

もつと気の利いた言葉があるだろうが、こつ言うのが精一杯だった。少し緊張しながらアイツの言葉を待った。

けどアイツは。

「岩沢さん・・・だつて？俺の顔に何かついてる？」

その瞬間私の頭の中の何かはじけた。

「・・・馬鹿！」

気がついたら私はアイツをひっぱっていた。
悲しくて、悔しくて、やるせなくて、何が何だか分からなくなっていた。

私は部屋から出て行きバンドメンバーが待っている第二講義室に走って行った。

ガラガラガラ！

「……………」

「い、岩沢さん！？どうしたんですか？」

私は入江の言葉を無視してギターを持った。

私は無性に演奏したかった。音楽でこの気持ちを忘れたかった。

「…………ちよつとね」

無理に笑って見せた。後からひさ子に聞いたら思い切り目は泣いていたそうだ。

嫌なことは音楽で忘れる。これは私が生きていた頃から変わらないことだ。

…………でもだめだった。どうしてもアイツの言葉がまとわりついてくる。

「ストップストップ！！」

突然ひさ子が演奏を止めた。

「…………？」

「岩沢、調子でも悪いの？今日は全然集中できてないけど」

「…………ごめん」

個人的な感情で演奏を止めるなんて最悪だ。リーダー失格だ……

「戦線のミーティングで何かあったのか？」

「ずばりの中だった。」

「確か新しく二人が戦線に入るんですけど。もしかして前岩沢さんが言っていた生前の思い人が現れたとか！？」

グッサア！

関根の鋭い一言でノックダウンしそうになったが辛うじて踏みとどまる。

これも後でひさ子に聞いたことだけど、そのときかなり拳動不審だったそうだ。

「も、もしかしてど真ん中ストライクってやつですか？」
最後に入江からのとどめの一撃。

私は近くにあった椅子に座って小さくつぶやいた。

「・・・そうだよ」

「それって、さつきから中を覗いてるあの男かい？」

ひさ子がドアの方をちらっと見る。

そこにはアイツがとまどうような顔でこちらを見ていた。

「・・・」

「どうやらあたりみたいだね。・・・どれ」

ひさ子は早足で歩み寄って扉を開けた。

ガラガラ

「さつきから見えていたようだけど何か用？」

ひさ子は少し強めの口調で言った。

「あ、もしかして例の新人ですか？」

入江は気を遣ったようだけど全くフォローになっていない。

「ってことは、岩沢さんが前言ってた・・・」

私は教室を出て行った。

途中でアイツの悲鳴が聞こえた気がするけど、どうでもよかった。

今はとにかく一人になりたかった。

「・・・さて、どうしようか」

何となく屋上に来てしまったが気晴らしに何をしようか分からなかった。

妙に首が重いと思ったたら私はギターを持ったまま外に出たらしい。仕方ない、何か歌うか。

さつき演奏していた曲から適当に選んで弾いてみる。

・・・途中で自然に止まってしまった。

「・・・やっぱりはたいたのは悪かったかなあ」

右の手のひらを見してみる。何も変化はないがじんじんしている気が

する。

「いや、アイツが悪いんだ。私は悪くない！」

もう一度手のひらを見てみる。

「……けどやっぱりまずかったかなあ。

キィ……

突然屋上の扉が開いた。誰かが来たみたいだ。

心配でいたい分かるアイツだ。

「……何しに来たの？」

ギターをベンチに立てかけた。

アイツは私の隣のベンチに座った。

「……いつもなら隣に座ってくれるのに。

「いやあ、岩沢さんが何か誤解しているみたいなんで」

アイツはまた他人行儀の口調で話してきた。

「……いつもなら私のことなんか気にかけてないような話し方なのに。」

駄目だ、やっぱり我慢できない。

「誤解なんてしていない！お前は、紅騎……綾崎紅騎なんだろう

！？」

私は叫んでいた。とにかく気づいて欲しかった。

「私だ！岩沢まさみだ！」

もう、無我夢中だった。

「お、落ち着いて岩沢さん」

「あ……」

そうだ、いくら私が叫んでも何も変わらないんだ。

「……すまない、取り乱して」

私はベンチに座った。何も考えられなかった。

「岩沢さんは生前の記憶がはっきりしている？」

突然の質問だったが話す気力はなく仕草だけで答えた。

コクッ……

「俺のことを生前知っていた？」

コクツ・・・

「じゃあ、俺がどう死んだのは知ってるか？」
フルフル・・・

知っているはずがない。私の方が先に死んだんだから。
ってことはアイツは自分自身がどうやって死んだのかは覚えている
のか・・・

「いつ頃この世界に来たの？」
ようやくしゃべる気が戻ってきた。

「一ヶ月前・・・」

今度はこつちからも聞いてやるうじゃないか。

「今度は私から質問して良い？」

アイツははつきりうなずいた。

「アンタは、生前何をしていた？」

生前の記憶がはつきりしているならすぐに答えられるはずだ。

「ライブハウスでバイトをして・・・ギターをやっていた」

正解だ。じゃあ、覚えているんだな生きていたときのこと・・・

私は意を決して質問した。

お願い・・・

「誰と？」

するとアイツは苦悶するような顔をした。

お願い・・・

「・・・分からない」

お願い・・・思い出して・・・

「本当に思い出せない？」

なんで私の思い出だけ失ってるの？

「ああ・・・」

アイツは、本物のアイツだった。

だけど、私の事を忘れたアイツはアイツじゃない。

「そっか・・・特定の記憶だけが無いみたいだね。」

だったら、思い出させてやる。どんなに時間がかかっても。どんな

に苦しくても。

・・・もし私が消えてしまふようなことになっても。

「私がアンタの記憶を取り戻す手伝いをしてやるよ。その代わりに私のバンドに入ってくれないか？」

一瞬の一時だったとしても私はアイツに呼んで欲しい。

「むしろこっちからお願いしたいよ」

私の事を岩沢じゃなくてまさみと呼んで欲しい。

あいつと握手をした。

懐かしい手の大きさと温もりだった。

「よろしく、岩沢さん」

そうしたら私も、綾崎じゃなくて紅騎って呼んでやる。

「・・・よろしく、綾崎」

another view〜岩沢〜(後書き)

明日から二日間諸事情により投稿しません。
よろしくお願ひします。

G i r l s ? D e a d M o n s t e r (前書)

二田ぶりの投稿です。

そねでほまひんが。

Girls? Dead Monster

「じゃあ、今日から私たちのバンドに入るようになった、綾崎紅騎だ」

翌日は正式にメンバーとして迎えられることになった。

意外にも全員俺が入ることに賛成してくれたらしい。一人くらいは反対する奴がいると思ったのに。

「綾崎紅騎です、よろしく」

・・・訂正一人いた。昨日俺を率先的に、てゆうかヤツ一人だけが俺に思い切りガン飛ばしてきている。

・・・なんで？

「で、右からベースの関根。ドラムの入江。ギターのひさ子。」

「よろしくお願いします！」

「よろしくお願いします」

「・・・」

「ああ、よろしく」

うん・・・思い当たる節がないぞ。

むしろこっちの恨みの方が大きい気がする。

「で、綾崎先輩は何ができるんですか？ギターですか？ドラムですか？キーボードですか？私から見るとギターっぽいですけど」

関根が間を開けずに一気に話してきた。

元気なのは分かったが、限度を軽く超えているぞ。

「ギターだよ。これでも生きてる頃は少しは有名だったんだぞ？」

今朝ゆりに無理を言って大急ぎでギターを用意してもらった。

俺が昔使っていたギターと全く同じ物だった。

ストラトキャスターの青系サンバースト。俺が初めて買ったギターでもある。

ゆりにギターの詳しい情報を書いて渡すとき頭の中にフッと別のギ

ターのイメージが出てきた。

そっちの方はだいたい形しか分からなかったから色だけ指定して俺のギターと同じ仕様にした。

もしかしたら失っている記憶の手がかりになるかもしれないからだ。

そのギターは俺の部屋にしまっておいてある。

「へー、バンドですか？」

入江も興味津々で聞いてくる。

「いや、ソロだ。地方のテレビで紹介されたこともあったけなあ」

確か路地裏のライブハウスだけにスポットライトを当てた番組だったはずだ。

俺はライブハウスのピPRで二人で演奏させられた。

・・・誰とだったけ？

「確か岩沢もテレビに出たことあるって言ってなかった？」

ひさ子が岩沢さんに話をふった。

「うん、ある」

へえ、岩沢さんも出たことあるんだ。

「ただし、私一人じゃないんだけどね」

ん？一人じゃないって事は岩沢さんはバンドでも組んでたのか？

「え？それってそこにいる綾・・・」

サツ・・・

素早く岩沢さんがひさ子の口をふさいで押さえ込んだ。

ヒソ（その話は今するな！）（ヒソ）

ヒソ（なんで？アイツはお前の好きな男なんだろう？）（ヒソ）

ヒソ（なんで知ってるんだ？）（ヒソ）

ヒソ（言わなくても分かるよ。昨日の乱れ具合と今日の笑顔具合で）

ヒソ

ヒソ（な・・・！）（ヒソ）

なんで、ひさ子にはやついてるんだ？岩沢さんも動揺しているみたいだし・・・

ヒソ（と、とにかくそのことは後で話すから！今は綾崎と私の事については触れるな！）ヒソ

ヒソ（はいはい、分かったよ）ヒソ
ようやく二人は距離を取った。

何があつたんだろ？岩沢さんは何か疲れた顔してるし。ひさ子はもの凄いにやにやしてるし。

「あの〜大丈夫でしょーか？」

「あ、ああ、大丈夫。じゃあ、綾崎、何か弾いて。」

いきなり！？何か弾けて何弾いたら良いんだよ！？

「どうした？ああ、大丈夫。一曲聴けばだいたいの実力は分かるから」

何が大丈夫なんだろうか・・・

「え〜岩沢は綾崎のレベルは知って・・・」

ギン！！

岩沢さんがひさ子の方をにらむ。

ひさ子は黙ったけどまだにやついている。

「アンタはちよつとは名の知れたギタリストだったんだろ？聞いてみたいんだよ。アンタの歌」

さっきのひさ子の影響か。岩沢さんは少しすねた感じの上目遣いで見てきた。

う・・・、ヤバイ。このギャップの破壊力はすごすぎる・・・

「わ、分かったよ」

これで断れるヤツがいたら紹介して欲しいぜ・・・

俺は生前よく弾いていた歌を思い出した。これなら暗譜でいける。

目を閉じて深呼吸をした後、軽く指を鳴らした。ギターを弾く前の俺の癖だ。

四人は黙ってこちらを見ていた。周りはシンと静まりかえる。

俺はイントロを弾き始めた。単調な音の並びだが乗りの良い曲だ。

「え・・・」

「こ、これって・・・」

「Crow Song.」
「.....」

俺は四人の驚いた表情を気にせず演奏を続けた。

最後の小節が弾き終わった。

のだけど。しばらく沈黙が続いた。

「え〜と、皆さんどうされたのでございませうでしょうか？」

「ど.....」

ど？

「どつしてCrow songを知ってるんですか!？」

関根が椅子からガタア!と立ち上がってこつちに詰め寄ってきた。

「ど、どつしてって言われても.....」

そつういえば何で知ってるんだろう。

こんな曲歌ってる人が生前いたっけ？

「Crow songは岩沢さんのオリジナルなんですよ!」

そつうか、オリジナルか!どつりで歌手名が出てこないはずだ。

「.....え?オリジナル?」

岩沢さんの方を見るとまだ放心状態で岩沢さんは固まっていた。

「お〜い、岩沢さ〜ん。お〜い」

関根が岩沢さんの顔の前で手を振った。

ハッ!?

.....どつやら気がついたらしい。

「綾崎!なんで!?!どつしてCrow songを知ってるんだ!」
「?」

岩沢さんが俺の襟首をガクガクガクツと揺さぶってきた。

「分からない、分からないけど頭の中にフツと思ひ浮かんだんだ!」

「・・・そうか、分かった」

ようやく手を離してくれた。

「で？どうだった？俺の演奏は」

俺はギターをスタンドに立てかけながら尋ねた。

「え？あ、ああ、正直驚いた。こんなに上手かったなんて」

「そ、そうか？」

「・・・それに懐かしかったな・・・」

「うん？何か言った？」

突然岩沢さんの顔が赤くなった。

おお、すげえ、一気に赤くなった。

「な、何でもなし！・・・私は十分合格だと思うんだけど。みんなは？」

「私も異議なし！正直驚きました！これって岩沢さんと同じくらい上手くないですか！？」

「私も賛成です。・・・そうですね。同じ空気は感じましたけど・・・」

「・・・異議なし」

どうやら、合格なようだ。

「・・・というわけで合格だよ。綾崎は私と同じギターボーカルにしようと思うんだけど？」

三人は特に異論はないようでそれぞれ肯定的な仕草をしていた。

「じゃあ、正式にバンドのメンバーとして歓迎するよ綾崎」

・・・そいえば俺が入ったらGirls Dead Monsterはどうなるんだろう？

”Girls”だもんな・・・

まあ、何とかなるだろ。

「改めてよろしく。みんな」

晴れて俺は本当にメンバー入りを果たした。

G i r l s ? D e a d M o n s t e r (後 書 き)

名前の方は・・・まあ、おいおい何とかします。
それではまた次話！

歓迎会（前書き）

しばらく投稿できなくてすいません。

なにぶん学生の身分なもので忙しくて・・・

できるだけ毎日投稿できるように頑張ります。

それではごっげ。

歓迎会

コツコツ・・・

「！」

サツ・・・

コツコツコツ・・・

「・・・ふ〜」

ソロソロ・・・

「そういえば生活科のあの教師がさ〜」

やばい！

どこか、どこか隠れるところは・・・

「そこだ・・・」

俺は近くの段ボールの中に隠れた。

「・・・あれ？なんかいた？」

「まさか〜気のせいなんじゃない？」

コツコツコツコツ・・・

あ、危なかった・・・

・・・この段階で俺が何をしているかわかったのだろうか。

俺は今女子寮に潜入している。

別に怪しいことをするつもりはない。断じてない。

ただ、練習後に歓迎会をするといわれて何の疑いもなく承諾してしまったのが間違いだっただけだ！

・・・普通気がつくよな。女子四人が男子寮に行くより男一人が女子寮に行くほうがリスクが低いわけだし。

だけど、あの時の俺は少し舞い上がったのかもしれない。

誰かに祝ってもらうなんて数えるくらいしかなかったもんな・・・そんなこんなで俺は某、蛇の名前の軍人さんのごとく段ボールに身を隠している。

「・・・さあ、困った」

岩沢さんの部屋（歓迎会は岩沢さんの部屋でやる）はこの寮の最上階にありしかも一番奥の部屋らしい。

廊下までは影があつて隠れやすいが、問題は階段だ。

エレベーターは使えないから階段で最上階に行くしかない。

しかし階段は隠れるような場所が無い。

だから必然的に段ボールをかぶつて進むしかないのだ。

「よし、綾崎紅騎行きまゝす」

俺は慎重かつ迅速に階段を上った。幸い夕食時の時間なので人はいなかった。

「よし、何とかついた」

俺はドアに岩沢と書いてあるのを確認し、インターホンを押した。

ピンポン

・・・ガチャ

ガン！

「おぶうー!!」

勢い良くあけられたドアが俺の鼻先にクリーンヒットした。

「よくたどりついたな綾崎・・・って、どうした！その鼻！」

どうしたって・・・あんたがやったんでしょが・・・

「・・・いや、大丈夫だ」

なんとなく悪い気がしてその言葉を押しとどめた。

「そう、じゃあ入って。もうみんな集まつてるから」

「・・・おじやまします」

案の定関根と入江の鼻には絆創膏が×状に張られていた。

ご愁傷様です・・・

「それじゃ、始めようか。綾崎、飲み物は何がいい？」

「一応聞くけど、何があるの？」

「えーと、ルヴィックと、クリスタルカイザーと、ペーエと、

ントリー天然水と・・・」

全部天然水じゃねーか・・・

「・・・なんでもいーよ」

「じゃあ、富山のバナジウム天然水ね」
「・・・もう、なんでもいいです。天然水好きだし。
ちなみにほかの三人はペットボトルで自分の分を買ってきている。
「よし、じゃあ綾崎がうちのバンドに入るってことで・・・」
『かんぱい!』」
俺の歓迎会が始まった。

それから三時間後の午後十時

「おい、あやさき〜ちよあつと、面かしえや〜」

「・・・なぜだ、なぜ岩沢さんは酔っ払っているように見えるんだ？
「もしかして、岩沢さん酔ってます？」

「ら〜にいつてんだあ、わらしは〜ぜ〜んぜん酔ってらいぞ〜」
酔ってる人のセリフだ!?

「ひさ子・・・岩沢さん、何か食べた？」

「ん・・・」

ひさ子は奈良漬けを差し出してきた。

ほかにアルコールが入っているようなものは無い・・・まさか・・・
いや、確実に酔ってる。

「岩沢さん・・・めっちゃ酒に弱いじゃないか!」

「あ〜岩沢さん食べちゃいましたか〜・・・あ、それダウトです
関根が他人事のように言った。

「そうになったら岩沢さん大変なんですよね・・・じゃあ、5です
入江も確実に他人事だ。

「じゃあ、この勝負に負けたやつが後片付け兼、岩沢の相手な・・・
綾崎、6だ」

「・・・ひさ子の奴、楽しんでるな。クソッ俺がずっと全敗だからっ
て。」

俺の手札には6が2枚ある。

よし、勝負！

「・・・よし、受けて立つ。ひさ子、ダウトだ！」

「ふふふ、残念」

ひさ子が出したのは本当に6だった。

「・・・綾崎先輩、6はさつき私が1枚出しましたよ」

「・・・何!？」

「・・・てか、なんで関根は分かったんだ？」

「がば」

突然岩沢さんが後ろから抱きついてきた。

「なんだ、さつきからわらしのころを無視して」

ぎゅっっ

岩沢さんはお構いなしに強く抱きしめてくる。

「んっ・・・なんだ、綾崎、手札に6と9しかないぞ」

「わっ言っちゃダメっ!!」

「ふっふっふ・・・わらしを無視した罰なのだ」

「・・・助けて、誰かっ」

結局また俺は最下位になってしまった。

歓迎会（後書き）

岩沢さんは酒にめっぽう強いイメージとすごく弱いイメージがあったので。

弱いイメージをとりました。

・・・いいなあ紅騎。

きっかけ(前書き)

そねどはぶしぞ

きっかけ

「それじゃあ綾崎先輩、ひさ子先輩、岩沢先輩をよろしくお願いしま〜す！」

「お先に失礼します」

歓迎会はお開きとなり関根と入江は帰って行った。

ひさ子はさすがに男女が残ると問題があると思ったのか自分も残ると言ってきた。

こちらとしても大助かりだった。

俺一人だけで片付けをしながら岩沢さんを流すのは不可能に近かったからだ。

「あれ〜・・・関根と入江は帰つらのか〜？」
ぎゅっ〜〜〜

まだ俺に抱きついていていた岩沢さんは手の力を強めてきた。

「か、帰りましたよ・・・って、苦しい・・・」

苦しくて呼吸を大きくすると、ふわっと女の子特有の甘い香りが出た。

こゝ、これが女の子の匂いってやつか・・・できれば別の時がよかった・・・

「ふふふふふ・・・じゃあ、私と二人つきりか、あ・や・さ・き」

「み、耳元でささやかないでください！」

ぞくっ・・・

な、何だろう・・・真正面から殺気が伝わってくるのだけど・・・

「へ〜二人つきりかあ・・・ずいぶんと見せつけてくれるなあ？綾崎い〜・・・？」

ひさ子がこの世のものとは思えないほどの形相でこちらを見つめていた。

ゾワゾワゾワ・・・！

「ち、違う！これは岩沢さんが！！！」

俺はあわてて岩沢さんを腕をほどいてひさ子の前に差し出した。

「すー……すー……」

「……寝てるじゃないか？」

「……」

岩沢さん……あなた……もうアルコールはやめてください……
ガスン！

思い切り鍋でぶん殴られた。

俺とひさ子は燃え尽きた（眠りに就いた）岩沢さんをベッドに寝かせて片付けを始めた。

とくに大がかりなことはやっていないので十数分で片付けは終わってしまった。

「綾崎、はい水」

「おう、サンキュ」

俺はもう用が済んだので帰ってもいいはずだが、ひさ子が話したいことがあると言ってきたのですこし残ることにした。

「で、話ってなんだ？」

ひさ子はテーブルを挟んで相向かいに座った。

「まあ、岩沢に大体のことは聞いたんだけど。お前、ある記憶だけなんだって？」

「ああ、そうだ」

その話か……まあ、俺としても何かきっかけになりそうだし、話してみるか。

「俺は、いつどこで生まれてどんな生活をしてきてどうやってしんだのかは覚えてるんだ」

「まあ、普通のパターンだな。……それで、どんな記憶が無いんだ？」

また、難しい質問だな。

「えーと・・・たぶん、”誰か”の記憶が無いんだと思う。・・・
たぶんそうだ」

「ふ〜ん・・・誰かのねえ・・・」

ひさ子はちらつと岩沢さんのほうを見た。

岩沢さんはぐつすり熟睡している。起きる可能性はなさそうだ。

「話は変わるけどアンタ、岩沢のことをどう思う?」

なんでそこで岩沢さんの話題が出てくるんだ?・・・まあいいけど。

「分かるわけないだろ。まだ知りあって数日しか経ってないのに」

「おかしいな・・・岩沢のほうはもう何年も知り合っているような
感じだぞ?」

・・・そういえばそうだ。

初めて校長室で会った時。屋上で少し話した時。CROW SON
gを演奏した時。

全部初対面の奴に向ける態度じゃなかった。

「・・・」

「しかも、最近の岩沢の挙動不審ぶりは普通じゃない。」

「・・・そうなのか?」

「ああ、そうさ、まるで恋をしている乙女みたいな溜息を何回も見
てるしな」

「・・・恋?」

見た感じ岩沢さんはギターに恋してますって感じだけど。

「ああ、これ以上は岩沢に言っつな!・・・って口止めされてるけど
な」

・・・これ以上って、だいぶしゃべった気がするんだけど。

「もしかしたらお前の失った”誰か”の記憶って岩沢のことだった
りして・・・」

「・・・かもな、その可能性もあるかもしれない」

俺は立ち上がって部屋を出ようとした。

「・・・早く戻るといいな、お前の記憶」

「・・・ああ」

玄関の扉を開けて急いで外に出た。用が済んだ以上ここにいてはま
ずいからな。

俺は女子寮と男子寮のちょうど真ん中あたりにあるベンチに座った。

「・・・記憶か」

俺は”誰か”の記憶を失っているってことは大体わかった。

問題はその記憶が誰の記憶なのかだ。

覚えているだけの記憶を探ってみる。

思い出すたびに引つかかるのはライブハウスでの記憶とどこかの公
園の記憶と商店街の記憶だ。

今日四人の前で演奏したCrow Song

あれは突然ふつと出てきたものだった。

同時にこの曲がとても気に入ってたこと。”誰か”と弾いていたこ
とを思い出した。

それにAlchemyだつて初めて弾いたような感覚ではなかった。
Crow songと同じような感覚を感じた。

「触れるものを輝かしてゆくそんな道を生きてきたかったよ・・・」

（悲しい歌だな）

（まあ、私の人生だからね）

（・・・でも強い歌だ。力強くまっすぐ前を向けさせてくれる）

（私もこんな人間になってみたかったなあ）

（なれるよ、今からでも遅くはないし、俺がそれを一番わかってる）

（あ、ありがと・・・）

「!」

な、なんだ・・・今のは。

これが・・・”誰か”の声・・・？

なんだろう、すげー懐かしい感じがする。

「・・・帰るか」

俺は男子寮に戻って深い眠りに就いた。

きっかけ(後書き)

挿絵が無いって不便ですね)

しかし！読者さんの想像力は無限大です！！

土日はすこし多めに投稿したいと思います！

・・・忙しくなければ(TAT)

オペレーション・トルネード発令（前書き）

それでは、ごうごう

オペレーション・トルネード〈発令〉

歓迎会の数日後俺と岩沢さんは校長室（前線基地？）に呼び出された。

なんでもこれから作戦会議を始めるらしい。

校長室にはゆりと、日向に音無と椎名、そのほか四・五人の戦線メンバーが集まっていた。

「みんな揃ったようね、それじゃあブリーフィングを始めるわよ」例のごとく部屋が暗くなつて上からプロジェクターが下りてきた。

「今回のオペレーションは”トルネード”を実行するわ」トルネード？学校に竜巻でも起こすのか？

「トルネードってのはどんな作戦なんだ？」

音無が質問した。

ああ、そういえばコイツも新入りだったんだっけ。

「簡単に言うと食券の巻き上げよ」

ああ、だからトルネードか。納得。

「巻き上げて、かつ上げでもするのか？」

「やだ、音無くんってば激しいのがお好み？」

ゆりがわざとらしくイヤーンとしなを作った。

「じゃあ、どう違うんだよ!？」

・・・だよなあ、かつ上げと巻き上げの違いなんて無に等しいからな。

「それは後になればわかるわよ。この作戦のメインは陽動班だから」え？俺たち？

岩沢さんのほうを見ると静かにうなずいた。

「私たち前線チームの任務は、陽動班が動いている間天使を近寄せないことよ」

そっぴや、これが俺の初ライブだったな。

・・・あ、そういえば男の俺が出てくるのってファンの人たちはど

う思っただろう？」

「・・・なあ、岩沢さん」

「ん、何？」

「バンドの名前って変えるのか？男の俺がいちゃ”Girls”じゃないだろ」

「ああ、ダイジョーブ」

「軽いなあ・・・」

「なんでそう言い切れるんだ？」

「二・三日前ユイ達にうわさを流させたんだよ。ガルデモにめちゃくちや上手い男が入るらしいってね」

「それで・・・反響は？」

「かなり良かったってさ」

「よ、よかった・・・」

「安心するのはまだ早いよ、アンタはめちゃくちや上手いってことになってるんだからね。」

「・・・そうでした。」

「下手な演奏はできないな・・・こりゃ」

無論失敗もだ。

「ん、ん、ん、そこのお二人さん、お話はもういいかしら？」

あ、そういえば今はブリーフィングだった・・・

「す、すみません・・・」

「じゃあ、作戦は今日の1800時ね、陽動班は1730時まで待機してて。後のみんなは細かい打ち合わせをするからちょっと残って」

『はい』

・・・俺の初ライブか、なんだかわくわくするな

「じゃあ、私たちも打ち合わせをするからいつもの場所に行こう」

「ん？あ、ああ分かった」

そして場所を移し、いつもの面々がそろった。

「じゃあ、今日の六時ジャストからゲリラライブをやるからそのつもりで」

「わっかかりました」

「はい」

「りょーかい」

さすが、やりなれているのかいつもと変わらないテンションだ。俺だけわくわくして少し恥ずかしい気もする。

「・・・で、何を演奏するんだ？」

「いつもは大体一曲で終わりだけど今回は新メンバーもいるから二曲でいいかな？」

「あ！そういえば綾崎先輩は今回が初ライブなんですね！」

「・・・忘れてたのか、関根よ。」

「じゃあ、Crow SongとAlchemyでいいと思います」

「・・・てかそれしか練習してないんだよ、入江よ。」

「ユイの話によるとすげー期待されてるんだって？綾崎」

「ああ、俺はうわさ上だめちやくちや上手いそつだ」

「はは〜・・・じゃあ、失敗はできね〜な〜」
他人事みたいに言うな、ひさ子よ。こっちはすでに緊張しかけてるんだ。

「じゃあ、移動を始める1730時までリハを兼ねて練習」

くそー・・・みんな俺のことは全く気にかけないで・・・

泣くぞ！泣いちゃうぞ！

「大丈夫です。綾崎さんなら上手く出来ますよ」

・・・その優しさが心にしみます。入江サン・・・

それから戦線メンバーの奴が呼びに来るまでみっちり練習した。

オペレーション・トルネード〜発令〜(後書き)

次回は紅騎の初ライブです！
お楽しみに

オペレーション・トルネード〈準備編〉

「陽動班は食堂のホールに移動してください」

五時三十分ジャスト、戦線の一人が呼びに来てくれた。

「じゃあ、行くのでしょうか」

岩沢さんがギターケースを担いで立ち上がった。

それに続いて俺たちも楽器を持つ。

入江はドラムのセットがあるのですでに移動している。

「緊張してますか？綾崎先輩！」

「いや、あんまり」

正直少し緊張はしているが思ったよりも落ち着いていた。

ほどよい緊張感と言うヤツだろう。

「さすが・・・大物くって感じがしますよ」

大物か・・・まだそんな器じゃないけど。

関根の緊張をほぐそうとする誠意は伝わってきた。

「ありがとな、関根」

関根はうれしそうに跳ねながらついてきた。

「やつほ、綾崎先輩にお礼言われちゃった」

関根の気分も上がってきたようだ。

「では、こちらに楽器をセットしておいて後は食堂で待機してください」

「あ、綾崎はここで待つてな」

岩沢さんが椅子とルヴィックを渡してきた。

ああ、そうか。ライブで紹介することになってるんだっけ。

「分かった」

「ついでに私たちの楽器のチューニングも頼んだよ」

ひさ子が注文してきた。

まあ、いつか。これから三十分何もしてないんじゃない暇すぎるからな。

「オーケー、半音下げでいいか？」

「ああ、それでいい」

三人は入江の待ってる食堂に姿を消した。

「・・・さて、やつちやいますか」

まず関根のベースを調節する。

「結構ベースつて重いんだな・・・」

あの小さい身体でよくもあんなにパワフルな演奏ができるな。

ベースの弦は4本しかないから楽だな。

まあ、六本も4本もあまり変わらないけど。

次にひさ子のギターを調節した。

弾きやすそうだなあ、ひさ子のギター・・・

こっちは手慣れているのですぐに終わった。

最後に岩沢さんのギターを手に取った。

「・・・?」

このギター・・・どっかで見たとあるような・・・

ストラトキャスターで、色は普通のサンバースト。どこでもありそ

うなタイプだけど・・・

そこじゃないんだよな・・・視覚的な記憶じゃなくて、実際に手で

触ったことがあるような・・・

おそろおそろチューニングを開始した。

(紅騎、エレキのチューニングってフォークと変わらないの?)

(だいたい同じだけど、ちょっと便利な道具がある)

(何それ、メトロノーム?)

(エレキはコイツに直接つないでチューニングができるんだ)

(へへ、けど紅騎は耳が良いから使わなくてもいいんじゃない?)

(普段使うときはな、けどミニライブの時は使ってるよ)

(ふん・・・)

・・・まただ、また前みたいな声が聞こえてきた。

チューニングを終えてそれぞれの配置に楽器を置いた。

ひさ子の言った通りやっぱり何か関係があるのか？

・・・岩沢と

オペレーション・トルネード〜準備編〜(後書き)

また、記憶が少し戻りました。
次は実行編です。

オペレーション・トルネード〈実行編〉(前書き)

そねではじめる

オペレーショオ・トルネード〈実行編〉

「こちら遊佐です。音声・照明の準備が完了しました。そろそろ良
いと思われます。」

四人の周りには気がついたファン達が押し寄せてきている。

「オーケー・・・それじゃあ、始めるとするか」

四人は紅騎が待機しているステージ裏に向かった。

「どうだい？綾崎、チューニングは」

ひさ子が言いながら自分の楽器の調子を確かめていた。

「・・・っ・・・うん、良いじゃん」

やっぱり分かるもんなのか。

岩沢さんがマイクスタンドの前に立った。

「みんな、準備は良いか？」

俺、ひさ子、関根、入江は同時にうなずいた。

入江は小さく深呼吸をしてドラムを叩き始める。

それに合わせて俺たちは演奏を始めた。

何事もなく最初の曲、Crow Songを弾き終わった。

あたりは熱気が立ちこめている。

すげえ、これがライブってヤツなのか。

何百人もの大人数が一つのリズムを取っている様子はまるで一つの
生命体のようなだった。

「みんな、いつも通り集まってくれてありがと。早速だけどコイツ
が新しいメンバーの綾崎紅騎だ」

スポットライトが一斉にこちらを向いた。

・・・これは、何か言わないと駄目なのか。

「どうも、ギターボーカルをやってます。」
俺は挨拶代わりにギターを弾いて見せた。

・・・人前でこんなコトするのは初めてだな。

ワアアア・・・

おお、良い反応だ。

「・・・とまあ、腕は確かだからみんな安心して。それじゃあ、最後行くよ」

岩沢さんがフィードバックを始める。

Alchemyは前奏の前に必ずこれをやる。

・・・練習じゃ、うるさいからやらならしいけど。

間髪入れずに前奏も弾き始めた。

一方前線組は戦線の敵、天使と壮絶な撃ち合いをしていた。
しかし、撃ち合いと言うには一方的すぎた。

天使のスキル、Destotionはどんなに鉛の弾丸を撃ち込んでもかすりもしない。

「・・・こそ、もうDestotionまで出しゃがったのか」

音無や日向達はかまわず撃ち続けた。一応足止めにはなるからだ。

「どけ、お前らああああ!!!」

野田が、とんでもない跳躍力でジャンプし身長ほどの長さもある斧、ハルバードを掲げた。

「死ね、オルルルルアアア!!!」

ふと、音無は思った。自由落下は言葉ほど自由なものじゃないと言うことを。

野田は馬鹿正直に”真っ直ぐ”天使につっこんでいった。

「ああ、馬鹿・・・」

その場にいた全員がそう思った。

天使はその場から数歩だけ遠ざかった。

「ば、馬鹿なああああ!!??」

馬鹿はお前だ、野田。

ズドーン……

野田は橋に思いつきり激突し、橋の支えごと粉碎した。

「退避！退避いいい!!」

「野田の大馬鹿野郎おおお!!」

ついでに周りにいた天使と他、数名の戦線メンバーを道連れにして野田は橋と共に崩れ去った。

日向と、音無はすぐに逃げたので大丈夫だった。

「……あつちも終わったみたいだぜ」

食堂の方を見ると大窓から白い何かが雪のように舞っていた。

一枚をつかんでみると、肉うどんと書いてあった。

「……食券？」

「そう、これがオペレーションントルネードだ。……お前、そんなんで良いのか？」

良いも何も、俺はあまり腹が減ってなんだけど……

音無はばつが悪そうに食堂に向かった。

オペレーション・トルネード〜実行編〜(後書き)

野田っていいキャラしてるよな
とくにかませ犬なトコガ(笑)

オペレーション・トルネード（打ち上げ）（前書き）

オペレーション終了後の打ち上げです。
それではどうぞ〜

オペレーション・トルネードく打ち上げく

「じゃあ、オペレーション成功に乾杯！」

ゆりが高々とオレンジジュースの入ったコップを掲げた。

『かんぱーい！』

それに合わせてみんなもコップを掲げた。

それにしてもここまで大胆な手段を使うとは思わなかった。

食事時をねらって陽動班がゲリラライブを始める。

当然天使は止めに来るが、そこは前線組が阻止する。

頃合いを見て、他のグループが用意した巨大扇風機を作動させて、

学生達の食券を一気に外に舞いあげる。

そこを前線組が回収。

とんでもなく計画的な犯行だ。

「・・・で、俺の報酬は白米に漬け物と？」

俺に渡された食券はご飯特盛りとみそ汁、馬鹿でかいキュウリをまるまる一本漬け込んだぬかずけだった。

日本の朝の食卓か！

「ぐ愁傷様・・・」

俺の相向かいに座っている岩沢さんはカツカレーを食べていた。

ギョルルルル・・・

い、いかん・・・カレーのにおいが俺の腹の虫を誘惑する・・・

「カツ、一個あげようか？」

岩沢さんがヒレカツをすくい取った。

「いいの!？」

「ああ、私肉あんま得意じゃないから・・・」

そう言っただけのカツを俺の所に移してきた。

「一個くらい食べなつて、ヒレだから油も少ないんだろっし」

俺は一個カツを戻した。

「・・・分かった」

よし、これで食事に華が加わったぞ

「いただきます」

ガツガツガツ・・・ン!

「む、んぐんぐん!?!」

み、水!

あわててコップを傾けた。

な、無い!?!?

「大丈夫か?ほら、水」

岩沢さんが水の入ったコップを差し出してきた。

バツ!

ゴツゴツゴツゴ・・・

「・・・はあ、はあ、・・・」

た、助かった。

「サンキュー、岩沢さん」

俺は、岩沢さんにコップを返した。

「あ、ああ・・・」

?、どうしたんだろう?岩沢さん。耳が真っ赤になってるが・・・

「岩沢さん・・・耳赤い・・・」

耳の所をつかんでジエスチャーをした。

「い、いや、何でもない!」

あわててカレーを食べ始めた。

かなり動揺しているのか、口に運んでいるスプーンには何も乗っていないことを岩沢さんは気づいていない。

パカッドバドバドバ

ん?何の音だ?

気のせいだろうか、俺の茶碗から七味唐辛子のきついにおいがするのほ。

・・・気のせいじゃなかった。

「ひ、ひさ子!?!なにしゃがる!?!」

ひさ子は空になった七味のビンを握りながら邪悪な笑みを浮かべて

いた。

「なにしゃがる？それはこっちの台詞だよ」

ひさ子は七味のビンをテーブルに置いたかと思うと素早い動作でスティックシュガーを十本俺のみそ汁に入れてきた。

「Noooooooooo!!」

「さつき、岩沢とさりげなく間接キスカましたのはどのどいつかなあ？」

「ぶ!!」

突然岩沢さんが盛大に水を拭いた。

岩沢さんはあわてて紙ナプキンで後始末を始めた。

「ほらあ、岩沢だって気にしてたんじゃないの。あんなにクールにはい、水……って言ったのに」

岩沢さんはさつきとは比べものにならないほど赤面していた。

うわあ、すげえ……完熟のリンゴみてーだ。

「……綾崎」

岩沢さんがじい……っと見つめてきた。

どうでも良いけど岩沢さんってまつ毛長いんだな。

「は、はい……なんでしょーか？」

俺はおそろおそろ聞き返した。

「……覚悟しとけよ？」

にっこりと岩沢さんが笑った。

ひさ子のよつな悪魔の笑みじゃなくいたずらっ子のよつな笑みが逆に怖かった。

オペレーション・トルネードく打ち上げく（後書き）

岩沢さんのデレ全開です。

次回紅騎の身になにか！？

記憶の整理（前書き）

砂糖入りの味噌汁ってどんな味がするんでしょね？
・・・。

それではどござう（泣）

記憶の整理

「……眠れん!!」

俺はがばあ!つと布団から起きあがった。

午後十一時。

当然寝ていなきや行けない時刻なのだがさっきの七味のものつけ盛りと砂糖入りのみそ汁がまだ効いていて、全く眠れない。

「くそくひさ子の奴」

まあ、俺があわてて食ったのが悪いんだけどさ……別に黙っておけばお互い意識することもなかったのに。

「……間接キス……ねえ」

「へくそのお相手は誰なんだい?」

いきなり真横から声が聞こえてきた。

「のわあああ!?!」

あわてて振り返るとそのお相手の岩沢さんが立っていた。

「い、岩沢さんどうしてここに!?!?つかどうやってここに!?!?」

「ん?ああ、ドアの鍵が開いてたから」

「……堂々と正面突破してきたわけですか。」

「じゃあ、何でここに来たのでございませうか?」

岩沢さんは近くにあった椅子に腰をかけた。

「まあ、ちよつと話したいことがあってね。あと用事もあったし」

男子寮に堂々と入ってきたことはこの際気にしないでおこつ。

「……話したいこと?」

何だろう?ライブのことかな?

特にミスはしていないはずだ。強いて言うなら挨拶が多少無愛想だった気がしたくらいだが。

「あれからあなたの記憶は進展があったか?」

ああ、そのことか。

まあ、俺がバンドにはいるのが岩沢さんが協力することの交換条件

だったからな。

「まあ、一応は」

断片的に思い出せているのは”誰か”の声だけだが、だいたい予想はできる。

「俺は、岩沢さんの記憶を失っているんですね？」

岩沢さんはすごく複雑な表情をしていた。

嬉しさ4割、悲しさ6割といったところか。

・・・当たりか。

「・・・どうしてそう言いきれるんだ？」

あえて聞き返してきた。

「まず、俺が断片的な記憶を思い出すときは全部岩沢さんが関わっています」

Crow Songを披露したとき。

Alchemyの一部分を口ずさんだとき。

岩沢さんのギターをチューニングしたとき。

全部岩沢さんが主として関わっていることばかりだ。

「それに普段の岩沢さんと比べた最初俺と会ったときのリアクション」

最近感じたことだけど、確かにあのときの岩沢さんは取り乱していた。

岩沢さんだけが俺を知っている。

・・・逆に言うとなんか俺は岩沢さんの記憶を失っていると言える。

「最後に、俺は岩沢さんと初めて演奏をしたとはどうも思えないんです」

「・・・そう」

「はい、あのライブで岩沢さんがどのタイミングでどんな音を出して欲しいのか身体が反応したんです。」

「偶然の可能性もあるぞ？」

「偶然じゃありません。Crow Songで間奏のタイミングが練習よりも少し早くなるのもちゃんと分かっていました」

「……………」

岩沢さんは黙った。

しばらく沈黙が続いて重い空気が流れた。

「そうか……ちゃんと分かってたんだな……そうか……そうか……」

岩沢さんは何度もそうか、と繰り返した。

まるで、今の現実を必死に受け止めているようにも見えた。

「確かにアンタが失ってるのは私の思い出だよ……断言はできないけどね」

……まだ反論しますか、この人は。

「あの……」

岩沢さんは俺の言葉を遮って続けた。

「でも、私が知っている綾崎紅騎はちゃんと記憶を取り戻した綾崎紅騎だからな」

……どういう意味だろう。

……………。

ああ、岩沢さんは遠回しに肯定しているんだ。

”絶対に”俺が岩沢さんの記憶を失っているだと。

「あ、そう言えば私と関わったときに少し思い出すと言ったな……覚えてましたか。」

「……………じゃ、じゃあ、今後は私ともっと関わっても……良いぞ?」

岩沢さん、なぜそこでもじもじするのですか。

(無理だろうけど) 自覚してください! そのギャップが(男にとつて)一番キケンだと言っことを!!

「ど、ど、どという意味ですか……?」

わあああ! 俺の馬鹿! 何で聞き返しちゃうんだ!

そこは、「頑張ってみる」とか「ああ、よろしく」で収まったはずだぞ!?

「た、例えば……」

ふわっ・・・

突然柔らかい温もりを感じて同時にかすかな甘い香りを感じた。

「い、岩沢さん!？」

岩沢さんに正面か抱きしめられていることに気づくのに数秒かかった。

「・・・どうだ?何か思い出したか？」

岩沢さんは抱きしめながら耳元で囁いてきた。

正直心臓がバツクンバツクンしていてそれどころじゃない。

「いや、特には」

「・・・だ・か・ら!俺よ!今そんなこと言ったら!!」

岩沢さんが離れちゃうかもしれないだろ!?

こんなシチュエーション滅多にないだろう。つーか今ぐらいしかこんな機会無いんじゃないか?

「・・・そうか・・・なら・・・」

「・・・え?」

岩沢さんがとんでもない行動に出た。

・・・俺を・・・押し倒してきた

「これなら・・・どうだ?」

重力つてすごいな。

岩沢さんとの密着度(?)がさらに高まった。

俺の心臓はさらに加速した。

や、やばい・・・冗談抜きで爆発するかも・・・

「・・・?綾崎、すごい・・・ドキドキしてる・・・?」

ば、ばれた!?

「いやあ・・・まあ・・・はい」

今俺の顔を見たらかなり真っ赤になってるんだろっな・・・

「わたしも・・・同じだから・・・」

・・・確かに俺の心臓とは違うリズムで鼓動を感じる。

俺より少し速いかもしれない。

「岩沢さん・・・俺より・・・」

「言つな・・・」

キュツ・・・

少し抱きしめる力を強くしてきた。

「!!!」

その瞬間俺は頭痛を感じた。

「どうした!? 一体どうしたんだ!! 綾崎!!!」

痛い・・・マジで頭が割れそうだ・・・

「ぐ・・・っ!・・・が、くううう・・・!!!!」

だ、誰か・・・助・・・け・・・

「綾崎、綾崎!?!」

徐々に意識が遠のいてきた。視界も暗くなり始める。

「誰か・・・誰かああ!」

岩沢さんはあわてて外に飛び出していった。

「岩・・・沢・・・」

そして、俺の意識は完全に消え去った。

記憶の整理（後書き）

岩沢さんの現段階では八割くらいのデレ度です。

どうでしたか？

・・・とまあ、最後は事件ですね。

物語は一つの山場を迎えます。

次回をお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2829y/>

暗闇からのキボウの歌

2011年11月22日02時00分発行